

# ウラジオストクからの 熱いラブコール

学生たちが抱く日本への憧れと思

さかもとゆうこ  
坂本裕子

極東国立総合大学東洋学大学日本語部

近くて近い国・日本

新潟空港から1時間半弱。ウラジオストクの中心部にはトラムが走り、ヨーロッパ風の建造物が立ち並ぶ、まさに「日本から一番近いヨーロッパ」である。この街の建造物の多くが、戦前日本の青年たちにより造られたという。港、官公庁ビル、鉄道関連倉庫、住宅、スタジアム等は、戦後、抑留された日本人により建設され、現在も街のいたるところに残る。

ウラジオストクでまず驚いたのは、街を走る車の9割までもが日本車であることである。実にロシアの輸入額の約1割を、ウラジオストクの対日中古

車ビジネスが占めると言われる。スーパーマーケットに並ぶ日本製品、日本食品の品揃えも充実し、ウラジオストクの富裕層は、決して手頃な価格とは言えない「日本ブランド」を愛用する。人々は海の街らしく気さくで温かく、冗談を言ってはよく笑う。地理的、歴史的、経済的背景からロシアの中でも親日といわれ、街でロシア人に「日本人だ」と言うと表情が和らぐ。ウラジオストクからすれば、日本は「近くて近い国」なのである。

日本語を学ぶ学生たち

ウラジオストクと聞くと「軍港」を連想する人も多いかもしれない。現在、ウラジオストク港はかつての軍港から貿易港へと姿を変え、市の人口約61万人のうち約1割が大学生という学生の街である。市内6つの大学のうち4大学で日本語教育が行なわれ、日本語を学ぶ学生数は約1000名。大学の予備教育機関であるカレッジ、公立の小中高一貫教育機関であるシニコラのほか、日本センターや企業でも日本語教育が行なわれ、市の児童館でも3〜15歳までの子どもたちが日本語や日本



↑シベリア鉄道の終着地のウラジオストク駅。モスクワからの距離(9288km)が記された記念碑などもある

→3〜15歳までの子どもたちが日本語や日本文化を学ぶ市立児童館にて。前列右端が筆者 写真提供：筆者(以下も同じ)

さかもと ゆうこ ●愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻博士後期課程満期退学。中国、国内で日本語教育、日本語教師養成に携わる。2006年8月よりロシア・ウラジオストク極東国立総合大学にジャパンファウンデーションの日本語教育ジュニア専門家として派遣され、大学における通常授業のほか、日本総領事館や日本センターの協力により、毎月現地教師向けの日本語教授法セミナーを開催。現在、5月のウラジオストク日本語弁論大会にあわせ、学生主導の「ウラジオストク日本文化祭」の準備に奔走中



文化を学ぶ。それらを合わせると約2500名が日本語を学んでおり、日本語は身近な外国語の一つと言える。

私がジャパンファウンダーシヨンのジュニア派遣専門家として勤務する極東国立総合大学東洋学大学日本語部は、1899年の創立時より設置されるロシア極東地域の日本研究、日本語教育の拠点機関である。東洋学大学前庭には与謝野晶子のウラジオストク来訪を記念した詩碑が設置されており、二葉亭四迷も当大学を訪れている。日本語部に在籍する約200名の学生は、それぞれ日本語学、日本文学、日本史、日本経済などを専攻し、5年間日本語と各専門科目を学ぶ。

当校に限らず、日本語を学ぶ学生の日本文化に関する知識は広く深い。現代っ子らしくアニメや漫画、音楽に関する情報には敏感で、着物や寿司、囲碁といった伝統文化や食文化への憧れも強い。経済、対日ビジネスへの関心も高く、中古車ビジネスが盛んな背景を受け、メーカーや車種、エンジン、部品の細部にわたる日本車の知識には圧倒される。このような学生の将来の希望は、日本と関連する自動車関係の

仕事につくことである。

### 日露年賀状・クリスマスカード交換

学生になぜ日本語なのかと尋ねると、学生の1人が「自分でもよくわからなけれど、子どものときから日本が好きだった」と答えた。他の学生たちも「着物が好き」「アニメが好き」「日本の音楽が好き」「寿司が好き」「漢字が好き」と答える。「好きだから」日本語や日本について学んでいるのである。

残念ながら、学生の日本への強い憧れと熱い思いに反し、日本の反応は消極的であり、なかなか学生の望む交流が実現できない。日本への留学も、文部科学省奨学金等によるプログラムにより、以前より機会が増えたとはいうものの十分とはいえない。また、各機関が共通して抱える悩みに、日本語を使う仕事につける学生が少ないことがある。この現実には学生の日本語学習意欲を減退させ、ひいては日本熱、日本語熱にも影響を与え得る要因であると受け止める。

こうしたなか、新潟の県立高校とウラジオストクの大学生の「日露年賀状・クリスマスカード交換」も今年で



与謝野晶子のウラジオストク来訪を記した記念碑。極東国立総合大学東洋学大学前庭にある



7回目を迎える。学生たちはカードに熱いメッセージを書き、文集やビデオを作成し、日本の高校生のメッセージを心待ちにしている。このほか、学生の知見と交流を広げるため、在ウラジオストク日本総領事館や日本センターによる日本文化紹介イベント、各機関で日本人留学生や在留邦人が参加する「会話クラブ」「日本クラブ」など、地道な活動が続けられる。



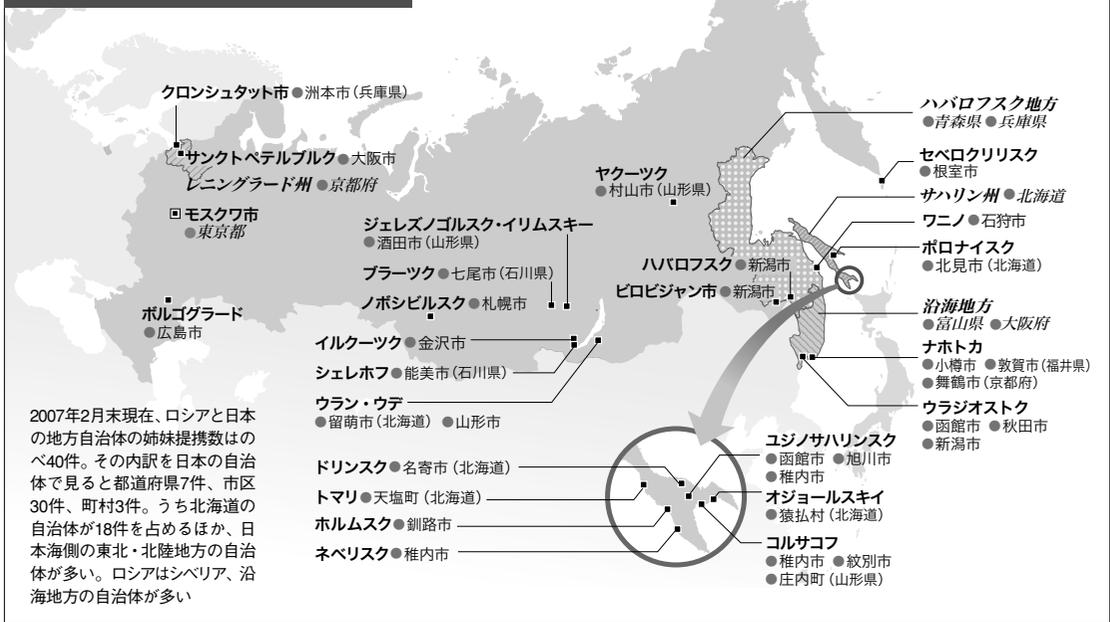
晴れの日が多いウラジオストクのどこまでも続く青い空は、日本で想像していたロシアの空のイメージではない。ウラジオストクの海の向こうは日本。ウラジオストクの学生の片思いが両思いになることを願ってやまない。

■ 日露年賀状・クリスマスカード交換

2006年度は新潟県立高田北城高校とウラジオストク4大学、約280名ずつが参加。2月9日には高田北城高校から渡辺政寿教諭がウラジオストクを訪問。市内アルセイニエフ博物館で高校生の作品の展示とイベントが行なわれ、日本からの年賀状が手渡された。学生たちは年賀状に書かれたロシア語の挨拶に驚き、絵がかわいい、返事を書きたい、高校生に会いたいと喜ぶ。日本の高校生はロシアの学生は日本語がうまい、字がきれいだ、日本の年賀状より数倍美しいと感心していたという。上はクリスマスカードを受け取った高田北城高校の生徒、下は年賀状を受け取ったウラジオストク4大学の学生たち



日露間で姉妹提携をしている地方自治体



2007年2月末現在、ロシアと日本の地方自治体の姉妹提携数はのべ40件。その内訳を日本の自治体で見ると都道府県7件、市区30件、町村3件。うち北海道の自治体が18件を占めるほか、日本海側の東北・北陸地方の自治体が多い。ロシアはシベリア、沿海地方の自治体が多い